「社説　『無者キリスト』を読む」

（1976年2月7日版「キリスト新聞」の社説より転載）

**本体の体受とその表現**

小池辰雄著『無者キリスト』を精読した。その書評はすでに本紙に掲載されたところであるから、くわしいことを省き、本書の内容のもつ読者への迫力つき、二、三の点を紹介しよう。

信仰に関する話は、話者の人格と霊的な悟りとか、以心伝心で聴者に通ずるものであるから、これを活字を通して、著者の信仰的境地が、時に脈々と、時にひしひしと読者に迫ってくる。ちょうどパウロの書簡を読むと彼の信仰と思想とが二千年の時の経過を超越して迫ってくるのに似ている。

『無者キリスト』は四福音書への忠実を保ちつつキリストを描いた作品である。福音書に忠実だと、叙述は平板になり、聖書の記録を綴り合わせてこれをなぞったものになる。そこで、内容を魅力あらしめようとすれば、今をときめく流行作家のキリスト物のようにに堕する。ところが『無者キリスト』において、著者は福音書通りの事実を記述しつつ、キリストの意識の深層を洞察し、その実存を究めつくし、

「キリストの言行を本体の現象面として受け、これを媒介として本体を体受している」

のである。

「神と合一、一体の実存者、徹底的におのれを無者とし、神の無限無量の愛と生命と光を体受して生きたキリスト、無即無量の境地、そこに贖罪死があり、そこに霊体をもって活現、復活するキリストがある」

というような叙述が福音書にあるキリストの実存や事件とともに現われてくるのが本書の特徴であり、読者の心霊に迫る力をもつのは、こうしたところにある。

日本語で書かれたキリスト伝として最高の評価を与うべき書の一つであろう。

**造語の霊妙**

も一つ、興味が深いのは著者の造語力である。宗教的な悟り、霊的な深みを表現するには、既存のことばだけでは足りない。トマス・カーライルが言語を酷使して深遠な思想を表わしたように、『無者キリスト』の著者は、慣用されていないことばを創作することにより、キリストの内面、否、実存への悟入と、読者へのこれが伝達を可能ならしめている。その例を示せば次の通りである。

「旧約、新約を貫いて身読・霊読せしめるものはキリストの霊である」

「みたまの貫在」

「キリストのふところへの投身」

「タリタ、クミ！　われらは倒れくずおれたとき、この言を霊聴して、霊性によみがえって邁進すべきである」

「ルカはイエスの十字架の受難、復活、昇天の大ドラマをエクソードスと表現したものと思う。これは逝去とか最後ではなくて、『出現世』である」

「聖書には次元の異なる激しい事象がたくさん記されてある……、いわゆる聖書研究などで何のかのと議論しても始まらない。研究というなら、祈り心をもって霊察、霊知する角度をもつべしである。自分の中に霊震が起きる」

「ナザレのイエスがみ霊のキリストとして、信ずる者の中に内住する実をペテロはじめ、使徒たち、その他いかなる人においてでも実証した。彼らの中にみ霊の実がまって、本当のとなった」

「福音の福音たるはこの聖霊を受けないでは決してつかめない。百聞一見に如かずというように、百聞一験に如かずである」

「信徒の集まりたるエクレシア（教団）──原語はむしろ召団──は聖霊の降臨を受けて始めてエクレシアの名に価するのである」

「復活のキリストがダマスコ途上のパウロに電撃的に現われ、彼を霊撃し照破した」

「彼はキリストのみ霊の愛の力に圧倒されて、福音を言とカリスマ的なわざとを以て身証したのである」

内に溢れる霊的たまものを、少ないことばで表現して、読者、聴者に伝えることこそ、信仰的著作や説教の妙諦である。現代の教会は言語の修飾をもって、霊的内容の貧困さを補おうとする傾向がないであろうか。この書に比較して、このことを感ずる。ただし著者が無教会の学者であるためか、エクレシア（教会）への霊察が足りないことは本書の「欠け」であろう。これが著者の霊知によって将来補われ、現代の教会に霊震を起こしてもらいたいものである。